

「ジェンダー・フリー」ということばは必要なのか

— ことばと概念の混乱を探る —

佐々木 恵理

1. はじめに

筆者が「ジェンダー・フリー」ということばを初めて目にしたのは、東京女性財団（1995、1997、1998）の『ジェンダー・チェック』シリーズか、同財団（1997）の『少し立ちどまって、男たち 男性のためのジェンダー・フリー読本』だったと思う。当時の私は「ジェンダー・フリー」ということばのおかしさに気づけなかった。実際のところ、「ジェンダー・フリー」は東京女性財団（行政）と教育分野の狭い領域での「専門用語」であるとも言え、1995年に北京で開催された第4回世界女性会議以降は、「エンパワメント」や「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」ということばのほうが時のことばであったように思う。

その後、「ジェンダー・フリー」ということばが広がりを見せると、さまざまな形で「ジェンダー（・フリー）パッシング」が起きる⁽¹⁾。「ジェンダー」や「ジェンダー・フリー」がマスコミで取り上げられれば取り上げられるほど、さまざまな言説が絡み合い、女性学・ジェンダー論の研究者・専門家がそれぞれの分野において、「ジェンダー」と「ジェンダー・フリー」について、またこうした状況についての議論を新たに生み出してきた。

本稿では、「ジェンダー・フリー」（gender-free）ということばの意味を再確認し、このことばが広まった経緯を簡単にまとめた。そのうえで、研究者たちがどのようにこのことばを捉えているのかを検証しながら、「ジェンダー・フリー」ということばを容認する人たちに反論を試みたいと思う。

2. 「ジェンダー・フリー」は英語である

英語には“gender-free”（性別のない）ということばが存在する。ただし、

日本語の「固定的ジェンダー意識・規範からの解放」という意味で使われることはまずない。“gender-free”は、主に次の2つの領域で使われてきた。

2.1 言語学分野における「性の中性化」

ひとつは言語学分野で、性差別語撤廃へ向けての言語改革を進めるために、「非性差別語」(non-sexist language)や「性中立語」(gender neutral language)とほぼ同様の意味で、「ジェンダーのない語」(gender-free language)は使われてきた。ここだけを単純に切り取ると、まさに「ジェンダー・フリー＝性をなくす、中性化する」という意味になり、バッシング側が繰り返してきた「フェミニストは男女の性別をなくし、人間を中性化しようとしている」という解釈は、全く「正しい」ものになってしまう。だが、“gender-free”は、あくまでも「不必要な性別表記をなくす」という意味であり、ことばを脱性差化するという文脈で用いられる。

言語学における“gender-free”は、1980年代のアメリカの言語改革運動と共に使われ始め、1987年には、よく引き合いに出される *The Nonsexist Word Finder: A Dictionary of Gender-Free Usage* (Rosalie Maggio, Phoenix, NY, Oryx Press) が出版されている。90年代にはPC(political correctness「政治的公正さ」)の議論が沸き起こるが、それに対する嘲笑的な嵐が吹き荒れた。この概念はイギリスへは90年代初めに、日本へは90年代半ばに輸入され、PC関連の辞典も翻訳された⁽²⁾。また、“Avoiding Sexist Language: How To Free Your Writing From Sexism in Word Choices and Usage”(性差別語を避けるために：ことばの選択と使用において性差別的に書かない方法)という項目が *Random House Webster's College Dictionary* (Random House, NY) の中に収められたのは1991年のことである。

2.2 性の二分法解体における「性の中性化」

「性」を規定する現在有効な3つの概念は、セックス(生物学的性)、ジェンダー(社会的性)、そしてセクシュアリティ(性的指向や性的身体性、または性行為や性行動)である。インターセックスの存在から見ても、性の二分法

は誤りであることが分かるし、ジェンダーが可変な性であることは、社会的、文化的、地域的、歴史的事実がすでに証明済みである。そして性的指向が異性愛だけではないことから、セクシュアリティは多様であると言える。「性」は常に揺らいでいるし、つまるところ、私たちは3つの性のそれぞれのグラデーションの中のどこかに存在しているに過ぎない。

英語の“gender-free”が使われるもうひとつの分野は、特にトランスジェンダー（トランスセクシュアル、トランスベスタイト）、インターセックスなどの性的少数者に関わる問題領域である。社会生活の便宜上、トイレ、着替え、風呂などの施設において性は厳格に二分されている。例えば MtF（男から女へ）のトランスジェンダーの人が男性用のトイレに入れば、なぜ女が入ってくるのかと思われ、化粧直しなどの「女の行動様式」を取れば奇異な視線にさらされる。女性用のトイレに入れば「女装した男」に見えることもあり、警察に通報されるわずらわしさもある⁽³⁾。

このような場合に必要になるのが、“unisex restroom”（共用トイレ）や“gender-neutral/gender-free restroom”である。“gender-neutral”（どちらの性でもない）や“gender-free”（性別をなくした）トイレなら、どのようなセックス・ジェンダーの人であれ、どのような性自認の人であれ、躊躇なくこのトイレを使うことができる。

また、性の二分法（性別秩序）が解体した社会を“gender-free”（性別のない）と表現することがある。常に自らの性別（セックス・ジェンダー）を問われ、どちらかの性に区分されてしまう社会は、性的少数者にとってはあまりに不自由である。そのためには、相手の性を問わず性区分もせず、また自らも性を語る必要がなく性区分されない社会の実現が望まれる。

現状としては、誰もがその社会のジェンダーに帰属（gender attribution）していかなざるを得ないのも事実であるが、50年、100年後には、現在の性別秩序が解体して、性の多様性がごく普通のことと考えられる“gender-free”な社会が訪れる可能性がないとは言えない。それが今、日本で言われている「ジェンダー・フリー」概念と同一・同質の社会であるかどうかはそのとき歴史が証明してくれるであろう。

奇妙なことだが、今のところ日本の性的少数者の当事者であっても「ジェンダー・フリー」を英語の“gender-free”の意味で使うことはないようだ。使うことがあるとしても、誤用の「ジェンダー・フリー」か、もしくは意味を混同して用いているように思われる。日本語の「ジェンダー・フリー」ということばがいかに特殊であるか、意味が混乱しているかがよく分かる。

3. 「ジェンダー・フリー」使用に関する議論

3.1 “gender-free”が「ジェンダー・フリー」になった経緯

「ジェンダー・フリー」ということばは、東京女性財団（1995）の『Gender Free 若い世代の教師のために』（深谷和子、田中統治、村田敦）に端を発し、その後も同財団から発行される数々のブックレット、パンフレットや報告書で頻繁に使われてゆく。このことばが日本語に移植された経緯については山口（2006a）が詳しく説明しているが、これに佐々木（2007）が述べた、書籍での「ジェンダー・フリー」ということばの導入のされかたを合わせると、以下のような事実が明らかになる。

1. この論文は同題目のシンポジウムからの「抜粋」でしかなかった。
2. 『ジェンダーフリーな教育のために』（東京女性財団、1995）の執筆者のひとりである深谷が、バーバラ・ヒューストンが「ジェンダー・フリー教育」を支持していると解釈した。
3. 深谷が“gender-free”の意味を「ジェンダーから自由になる」という意味に誤訳した。（亀田温子も同時期に誤訳した？）
4. 女性学・ジェンダー論の教育分野の研究者がこのことばを引用した。
5. 女性学・ジェンダー論の他の研究分野の研究者や、性教育、教科書類、子ども向けの読物の著者がこのことばを援用した。

言語という観点から問題なのは、「3」の誤訳および「4」と「5」の引用・援用である。“gender-free”の誤訳の原因は、“-free”を「～のない」ではなく、「～から自由な」と捉えてしまう日本語人特有とも言える訳し方にあっ

た(佐々木2006)。そして、最初に誤訳をした深谷だけではなく、その後も亀田を初めとする教育分野の研究者そして女性学・ジェンダー論のその他の研究者たちがこの誤訳を受け入れてしまったのである。さらに「権威者」である研究者がこのことばの発信者になることによって、「ジェンダー・フリー」は英語の“gender-free”とは異なる意味をたずさえて広まることになった。

3.2 「ジェンダー・フリー」使用への態度

では、「ジェンダー・フリー」をめぐる議論において、研究者はこのことばをどのように捉え、論じているだろうか。「ジェンダー・フリー」使用に対する研究者の態度は分かれているが、「ジェンダー・フリー」を使わない人は使う人に配慮してか、「使う使わないは個人の自由である」としてこのことばについての議論を避けているように思われる。『『ジェンダー』概念を話し合うシンポジウム』の全体討議を活字化した『『ジェンダー』の何が問題なのか』(若桑他編著2006、pp. 179-196)から見てみよう。このシンポジウムでは、会場参加者とパネリストがさまざまな発言をしているが、その場はどちらかというと「ジェンダー・フリー」使用を擁護する空気に満ちている。ことばと概念の部分だけを抽出していくつか引用してみる。

伊田広行「[現場で『ジェンダー・フリー』を使ってきた]そのときに学者が『私は使っていない』なんて言うのは、どういう意味をもたらすのか。自分は使わなくとも、ほかの人が使うことの足を引っ張るなど思ったんです。だからそういう意味で、ジェンダーフリーはいま、まさに積極的に使う人は使っていて、使わない人は自分なりの表現を使えばいいだろうってのが私の思うところです」(p. 182)。江原由美子「ジェンダーかジェンダーフリーかとか、どういった定義をするかしないかというようなことを際立たせてそんなに論争してもあんまり意味がない感じがしてます。それぞれが自分の使いたい言葉を使っていくことを、きちっと実践していくことです」(p. 191)。井上輝子「(略)ジェンダーフリーという言葉を使うことによって広がったのは、男性自身がジェンダー秩序のなかでいろいろな抑圧を受けているという問題を深めることができたことです」(p. 192)。若桑みどり「(略)ジェンダ

ーフリーという言葉が男女平等と違うところは、ジェンダーという概念を基礎にしている、ということです。(略)ですから、ジェンダーもしくはジェンダーフリーという概念は、男女平等とか差別撤廃という言葉の上位概念だと思っている」(p. 193)。

こうした中で緩やかに異論を述べているのが、加藤秀一と金井淑子である。加藤は初めに、「ジェンダー・フリー」を使った利点は、ジェンダーという概念が性的少数者の問題を取り込むことができたことだと言う(先の井上もこの点については触れている)。その後「こういう問題を考えていくために、それをジェンダーフリーというかどうかは別ですが、少なくともこれはジェンダーという言葉によって初めて見えてくる問題なんです」と「ジェンダー」と「ジェンダー・フリー」の概念を明確に分けている(pp. 195-196)。だが、加藤は同書(若桑他編著、2006)の「ことばは生きている、あるいは、よりよき相互理解のために」では、石原慎太郎東京都知事の「『ジェンダー・フリー』は外来語だからよくない」という発言について、「ところで②[石原の発言]については、実は私も一理あると思っている。できるならば『ジェンダー』という特殊な外来語ではなく、適切な邦訳語があればよかったのと思うこともある。だが、学問は一人でつくるものではないので、何十年かの歴史を経て、『ジェンダー』が日本語の中にもある程度定着してきた以上、いまさら無理に変える必要があるとは思わない」と述べている。石原は「ジェンダー・フリー」ということばについて言い、加藤は「ジェンダー」ということばで答えており、ここではことばが交差しているのが分かる。

また、金井は「ジェンダー・フリー」ということばが使われ始めたときに「[みんなそれぞれの文脈で]いま誤解されてしまうような使われ方になっていきかねないんじゃないか」と指摘し、フェミニズムから女性学、そしてジェンダー研究への移行への違和感を説明しつつ、婉曲的に「ジェンダー・フリー」使用に対する疑問を呈している(pp. 208-209)。

このように見てみると、討論の場という限界はあるが、ジェンダーについてなのか、「ジェンダー・フリー」についてなのか、またことばの使用についてなのか、それが指し示す概念についてなのか、議論の内容に曖昧な箇所も

多く分かりにくい。だが少なくとも、「ジェンダー・フリー」ということばを使わないことが直接ジェンダー（概念）を否定するように取られかねないことを懸念してか、全体としては、ことばそのものの議論を回避しているようにも見える。

3.3 「ジェンダー・フリー」使用の擁護論

バックラッシュに対抗するべく編まれたこの若桑他編著（2006）は、「ジェンダー・フリー」概念を守ろうとして、「ジェンダー・フリー」ということばの使用を擁護しようとするむきがある。井上輝子の『『ジェンダー』『ジェンダーフリー』の使い方、使われ方』の「注10」では、「ジェンダー・フリー」（gender-free）が次のように説明されている。

「ジェンダーフリー」は和製英語であり、gender-freeは英語圏では使用されていないかどうかについてGoogleで英語のgender-freeを検索してみたところ、約十万件がヒットした。最初に出てきたのは、Gender-Free Legal Writing, Gender-Free Languageなど言語関係の項目で、“Nonsexist Word-finder: A Dictionary of Gender-Free Usage”といった辞書も発行されていることが分かった。言語論以外の項目も多く、例えば、Elizabeth's Gender Free Universeの説明には、Celebrating and promoting Gender Freedom and Gender Equality by pushing forward the cutting edge of gender politicsとあり、日本で使用されている用法と大差ない使用例があることが分かった。（p. 81）

井上がここでいう辞書は本論の「2.1」で示したが、日本ではすでに1990年に『性差別をなくす英語表現辞典 ―使えない言葉★避けたい表現―』（笠井逸子訳、ジャパントイズム）⁽⁴⁾として翻訳されている。原題の“gender-free”が邦題では隠れてしまったため、日本における“gender-free”ということばの浸透には貢献できなかったということになる。また、れいのるず・秋葉かつえは1998年に、“gender-free (language)”を「ジェンダー・フリーな (G-

フリー)」と訳している。

同じように検索してみたところ（2006年09月20日）、井上が「言語論以外の項目」として挙げているサイト⁽⁵⁾は2ページ目の8番目としてヒットした。ブラウザーのタイトルバーには“Elizabeth's Gender Free Universe:Welcome”（エリザベスのジェンダー・フリーの世界：ようこそ）とあり、“Elizabeth's Gender Free Universe”は一番上のバナーらしきものの中に、“Celebrating...”（ジェンダーの政治学を切り開くことによって、ジェンダーの自由と平等を祝して）は同じバナー内の下に書き込まれている。

“Elizabeth”をクリックするとエリザベスの横顔が次のように紹介されている。「(略) 私は35歳で、固定的なジェンダー・ステレオタイプから回復した人間である。私は手術をしていないトランスセクシュアルで、この文化によって、二つしかないジェンダーのどちらかを選ばざるを得ないその抗議として、できるかぎり手術をしないことを選択している」⁽⁶⁾。つまり、エリザベスは MtF（男から女へ）のトランスセクシュアルで、彼女は自分をどちらかのジェンダーに押し込めてしまうこの社会の性の二分法の解体を、すなわち“gender-free universe”（性別のない世界）を望んでいることが分かる。このページは「言語論以外の項目」と言うより、むしろ性的少数者のページであると言うべきであろう。ここで使われている“gender-free”は、日本語の「ジェンダー・フリー」の意味ではない。

次に、日本女性学会ジェンダー研究会編（2006）の「Q33ジェンダーフリーという用語は誤解されやすく危険なので、使わないほうが良いという人がいますが、どうでしょうか？」という問いに対する伊田広行による回答を見てみたい。学会内部の研究会編ではあるが、外部からは学会の総意と取られかねない点でも、またことばと概念の関係という視点からも重要である。

A ジェンダーフリーには多様な意味があり、議論が分かれています。適切に使えば非常に有効な概念です。使いたくない人は使わなくていいですが、使いたい人の足を引っ張るべきではないでしょう。一部のデマに影響されて、その使用を全面禁止としたり、それを用いる者を排除することは、

思想統制にあたるものです。(p. 153)

論を進める前提として、言論弾圧が可能なのは支配者側からであり、単純に「使いたくない人」や「使いたい人の足を引っ張る人」がことばを全面禁止にしたり思想統制ができるはずがないことは確認しておきたい。

伊田が「ジェンダー・フリー」概念を浸透させようとする意図は理解できる。だが、続く「ジェンダー・フリーという概念が、バーバラ・ヒューストンの論文の誤読に基づくものだということを根拠にして、この概念を使うべきではないという意見がありますが、それは外国人の誰かの使い方が正しいという権威主義的発想です。誰かひとりの最初の使い方だけに正当性があるということはいえません」以降から、論理的であるとはいいがたい過度の擁護が始まる。

「外国人の誰かの使い方」というのは、アメリカ人であるヒューストンの使い方のことであろうが、ヒューストンでなくとも英語人であれば、“gender-free”を日本語でいうような意味としてはまず用いない。基本的な英語の用法を無視して“gender-free”を日本に持ち込み、新しい概念を付与して「ジェンダー・フリー」として使ってもよいというのはかなり飛躍した考えであろう。この問題は権威主義（英語至上主義）とは別次元の問題である。

伊田はまた「ジェンダーフリーを、ジェンダーレス、つまり『ジェンダーがないこと』『人間の中性化』『ジェンダーを無視すること』『ジェンダーというものを考えないこと（考慮にいれないこと）』であるというようにとらえて、この概念がダメだという人もいますが、そのような使い方をしなければいいだけです」(p. 157)と書いている。この箇所はバックラッシュ側への直接的な反論だと思われるので、こうした極端な表現を用いることは有効かもしれない。しかしながら、ことばと概念を結びつけようとするときに、ことばの使い方の問題へと焦点をずらすのには無理がある。「ジェンダー・フリー」は和製英語とは言えないが、「誤訳された造語」であると言える。そのために多くの誤用と誤解を生んでいるのである。

日本語では否定語をつくるために「反、非、不、未、無」などの接頭語が

使われるが、日本語人は「反社会的」とは言っても、同じ意味で「非社会的」とは言わない。同じく「非科学的」と言うが「不科学的」とは言わない。「不条理」と言うが「未条理」とは言わない。「未達成」と言うが「無達成」とは言わない。もちろん「未調整・無調整」や「不人情・非人情」、「無礼・非礼」、「無回答・未回答」など、複数の接頭語がつく語もある。外国人には難しくとも、日本語人はこうした接頭語の選択を無意識に行っていて、その用法が正しいかどうかを瞬時に判断できる。

伊田の主張をこの日本語に当てはめて考えてみよう。外国人が「未婚」ということばを「非婚」の意味として誤訳し、自国に持ち込んだとする。このとき、「既婚／未婚」という婚姻の有無を表す用法と、「法律婚／非法律婚」という婚姻関係の法的違いを表す用法が混同されているのが分かるであろう。そしてその外国人が、自分の国では「未婚」を「婚姻制度の束縛から自由になるために結婚をしないこと」と解釈（概念化）するからそれでよいと言っているのと同じことになる。

さらに伊田は、混乱や反論が起きたときには、「他者の『ジェンダーフリー』の理解や定義にとらわれずに、再度、『私はこのように使っています』とジェンダーやジェンダーフリーの定義を自分なりにはっきりさせてそれを伝えていけばいいということです。自分にとってその概念の中身が明確にあってその使い方が適切であれば、使ってもいいのではないのでしょうか」(p. 156)とも言う。用語使用の自由は認めるとしても、ことばを使うたびに自分の定義を表明しなければ使えないようでは、社会の合意を得られずその概念を共有するのは難しい。日本における「ジェンダー・フリー」ということばはまさにこうした混乱の中にあると言える。

4. なぜエイゴでことばを造るのか

不特定多数の何語を操る何人であれ、“gender”ということばに“-free”をつけて使用することは可能である。しかし、“gender-free”ということばがそうした自由な意思に基づいて、自由に意味づけされた場合には、もはやある特定の概念を指し示す必然性もなく、それを主張する意味がないという

逆説的な状況も成り立つ。「ジェンダー・フリー」ということばは今後も使われつづけるかもしれないが、誤用・誤訳から始まった曖昧なことばであることには違いない。

外来語の言い換えについては、その国の言語状況に見合った方法が選択されている。例えば、中国語の場合は、外来語をすでにある中国語に置き換えたり、音訳したり意識したりして言い換えを行う。アイスランド（アイスランド語）とタンザニア（スワヒリ語、公用語は英語）では、外来語である英語が自国語でまかなえる場合は自国語を使い、できるだけ借用語は使わないという基本姿勢があるという⁽⁷⁾。日本の場合、特に英語に関しては機械的に英語をエイゴにして、その定着を待つのである。そのため、エイゴはそのことばの専門領域のみで定着はするものの、専門家以外には分かりにくい。また流行語のように連呼されると、意味よりも音^{オン}が優先されて広まってしまう。どちらにしてもエイゴは曖昧なことばになりやすい。

ことばの翻訳は、他言語と同義のことばを探す作業でもある。山口智美が行ったインタビュー（山口2006b）ではその難しさが見え隠れする。インタビュー相手は「ジェンダー・フリー論争」の元となったジューン・マーティンとバーバラ・ヒューストンである。「ジェンダー・バイアス」（gender bias）をめぐる、山口が『バイアス』という言葉も、日本語では外来語なんです。だから、あまり意味が明確ではありません。でも、その意味を説明しないで、とくに学者をはじめとする人びとが『ジェンダー・バイアス』という言葉を使っています。（略）」と述べ、次のように会話が続く（以下、H：ヒューストン、M：マーティン、Y：山口。段落や表記は一部変更した）。

H「日本語にバイアスという言葉がないというのは、注意を必要とする問題ですね」、M「差別(discrimination)は?」、Y「差別という言葉はあります」、H「偏見(prejudice)は?」、Y「あります」、H「だとしたら、『ジェンダーに基づく偏見』とか、『ジェンダーに基づく差別』などが、適切な言葉なのではないでしょうか」（p. 216）

日本語には“bias”を指すことばがないのではなく、ここで議論されている語彙のうち「バイアス」のみが（曖昧な）エイゴとして定着しているとい

うほうが正確である。そして「バイアス」から「バイアス・フリー」ということばが造られ、それが“bias free”という英語へ還元されると、“bias”と「バイアス」という意味・概念の違いが明らかになったというわけだ。このように英語人とことばをつき合わせてみれば、日本においていかに英語(=エイゴ)が乱用されているかが分かる。

そしてここにこそ落とし穴がある。このやりとりの前にはヒューストンが、“gender-free”よりも“freedom of gender bias”のほうがいいと言う場面もあるのだが、日本で「固定的ジェンダー意識・規範からの解放」という概念を表すために、なぜ英語からことばを持ち込む必要があるのかということがまず問われねばならない(ちなみにこの場では、山口が教えを乞い、ヒューストンがそれに答えたわけでない)。

この背景には英語の優位性と権力(パワー)が潜んでいる。そこから見えるのは、英語圏の研究(概念)を最優先する研究者の態度であり、それがその概念を広めた研究者に対して過度の評価を行うことにつながっている。つまり、研究者はある英語を見つけて切り取り、エイゴに換え、それを広めて「キーワード」として機能させてゆくのである。これはどの学問分野でも起こっていることであり、「ジェンダー・フリー」に限ったことではないことは強調しておきたい。

5. まとめ

日本ではどのような外国語もカタカナで表記してしまう傾向が強い。日本語の柔軟性という点から見れば、すべてを負の側面から捉えるべきではないであろう。しかし、英語至上主義を背景に、そこにはエイゴの曖昧性や多義性を自然と受け入れてしまう日本語的文化がある。「ジェンダー」は社会を読み解くための重要なことば・概念である。そうであれば、「ジェンダー・フリー」という日本でしか通用しない「和製英語」を造り、それを概念の問題にまで広げて議論してゆく必要などないのではないだろうか。エイゴであれば「ジェンダー・イクオリティ」(gender equality)や「ジェンダー・エクイティ」(gender equity)を使うほうがいいし、その訳語である「ジェンダー平

等」のほうが、用語としてははるかに分かりやすい。

「ジェンダー・フリー」はすでにひとり歩きを始めていて、「ジェン・フリ」という短縮語や、「ジェンダー・フリーなトイレ」という派生語も生まれている。後者は、前述した“gender-free restroom”の意味でも、日本語の「ジェンダー・フリー」概念が指し示す意味でもなく、「トイレのマークの色を赤・黒（青）と性別で分けず、同色にしているトイレ」のことを言う。「ジェンダー・フリー」ということばをこのまま積極的に使いつづけると、その概念はさらに複雑になり、新しい造語が増えないとも限らない。

外来語の言い換えは簡単ではないにせよ、決して不可能ではない。なぜならば、ある言語を別の言語に移し変えようとする行為そのものが、すでに同じ意味・概念・状態・状況を表しえないからである。ズレが生じることは当然のことであり、だからこそ翻訳は可能である。そこでは、その外国語がもつ概念と日本語のそれとがどこで交わり、どこで決して交わらないのかといった不毛な議論に陥ることはない。

ある英語がもつ意味・概念がそのまま日本語に呼応しないからこそ、安易にエイゴに置き換えるのはやめになりたい。ただし、それは誰が決めるのかの問題である。「ジェンダー・フリー」に関しては、フェミニストたちがその方法を探るしかないであろう。

注

- (1) バッシングについては、日本女性学会ジェンダー研究会編（2006）の資料「⑥ジェンダー／ジェンダーフリーおよびバッシング関連年表」に詳しい。
- (2) Beard & Cerf（1992）および Rees（1993）の翻訳本。
- (3) 性区分のある施設の使い分けについては田中玲（2006）pp. 47-53を、外見表示と性別のふり分け（性別カテゴリー）の関係については佐倉智美（2006）pp. 84-94を参照のこと。
- (4) 「訳者はしがき」で「女史」ということばが使われているのは大変残念である。
- (5) <http://www.geocities.com/westhollywood/4298/GenderWorld.html?200625>。2006年9月25日以降、Googleで検索不能となる。
- (6) 原文：“This is where you get to find out a little about me and my family. I’m

35 years old, and I am a recovering participant in rigid gender stereotypes. I am a pre-op transsexual, and I am choosing to be non-op as long as I can in protest of the limited gender choices we are forced into by our culture....”

- (7) 国立国語研究所 (2006) pp. 117-118, p. 47. 英語のトルコ語、ドイツ語、フランス語への影響と英語至上主義への対処は、山田 (2005) pp. 18-37を参照のこと。

参考文献

- 木村涼子他 (2005) 『ジェンダー・フリー・トラブラーバッシング現象を検証する』現代書館
- 国立国語研究所 (2006) 『外来語と現代社会 (新「ことば」シリーズ19)』
- 佐倉智美 (1999) 『性同一性障害はオモシロイ 性別って変えられるんだヨ』現代書館
- (2002) 『女が少年だったころ ―ある性同一性障害者の少年時代』作品社
- (2006) 『性同一性障害の社会学』現代書館
- 佐々木恵理 (2001) 「非性差別語への言語改革に今必要なこと」『女とことば 女は変わったか日本語は変わったか』明石書店
- (2002) 「動物をめぐることばと表現 (3)―犬の訓練になぜ英語を使うのか」『ことば』23号、現代日本語研究会
- (2006) 「日本語人は『ジェンダー・フリー』をどのように理解しているか ―大学生の調査から―」『ことば』27号、現代日本語研究会
- (2007) 『『ジェンダー・フリー』の言語領域からの分析―“gender-free”の誤用と『ジェンダー・フリー』の混乱』『ことばとジェンダーの未来図―ジェンダーバッシングに立ち向かうために―』明石書店
- セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著 (2006) 『セクシュアルマイノリティ 同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』第2版、明石書店
- 田中玲 (2006) 『トランスジェンダー・フェミニズム』インパクト出版会
- 東京女性財団『ジェンダーチェック 男女平等への指針』「家族・家庭生活編」(1995)、「学校生活編」(1997)、「職業生活編」(1998)
- 虎井まさ衛 (1996) 『女から男になったワタシ』青弓社
- (2003) 『男の戸籍をください』毎日新聞社

中村亜美 (2005) 『心に性別はあるのか? ～性同一性障害のよりよい理解とケアのために～』

医療文化社

日本女性学会ジェンダー研究会編 (2006) 『Q & A 男女共同参画／ジェンダーフリー・バックラッシュへの徹底反論』

野宮亜紀他 (2003) 『プロブレムQ & A 性同一障害って何? 一人一人の性のありようを大切にするために』 緑風出版

橋本秀雄 (1999) 『男でも女でもない性 インターセックス (半陰陽) を生きる』 青弓社

彭飛 (2003) 『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴―漢字と外来語編』 凡人社

山口智美 (2006a) 『『ジェンダーフリー』論争とフェミニズム運動の失われた10年』

(2006b) 「ジェンダーを考える」

共に、上野千鶴子、宮台真司、斉藤環、小池真理他 『バックラッシュ! なぜジェンダーフリーは叩かれたのか』 双風舎

山田雄一郎 (2005) 『外来語の社会学 隠語化するコミュニケーション』 春風社

れいのるず・秋葉かつえ (1998) 「日本語の性差別」 『「ことば」に見る女性―ちょっと待って、その「ことば」』 東京女性財団

れいのるず秋葉かつえ、永原浩行編 (2004) 『ジェンダーの言語学』 明石書店

若桑みどり他編著 (2006) 『「ジェンダー」の危機を超える! 徹底討論! バックラッシュ』 青弓社

Beard, Henry & Christopher Cerf (1992) *The Official Politically Correct Dictionary and Handbook*, Villard Books (『当世アメリカ・タブー語辞典』 馬場恭子訳、文藝春秋、1993)

Rees, Nigel (1993) *The Politically Correct Phrasebook*, Bloomsbury Publishing Plc, London (『差別語・婉曲語を知る英語辞典』 脇浜義明訳、明石書店、1996)

Schwartz, Marilyn and the Task Force on Bias-Free Language of the Association of American University Presses, *Guidelines for Bias-Free Writing*, Indiana University Press, 1995. (『バイアスフリーの英語表現ガイド』 前田尚作訳、大修館、2003)

(ささき えり)